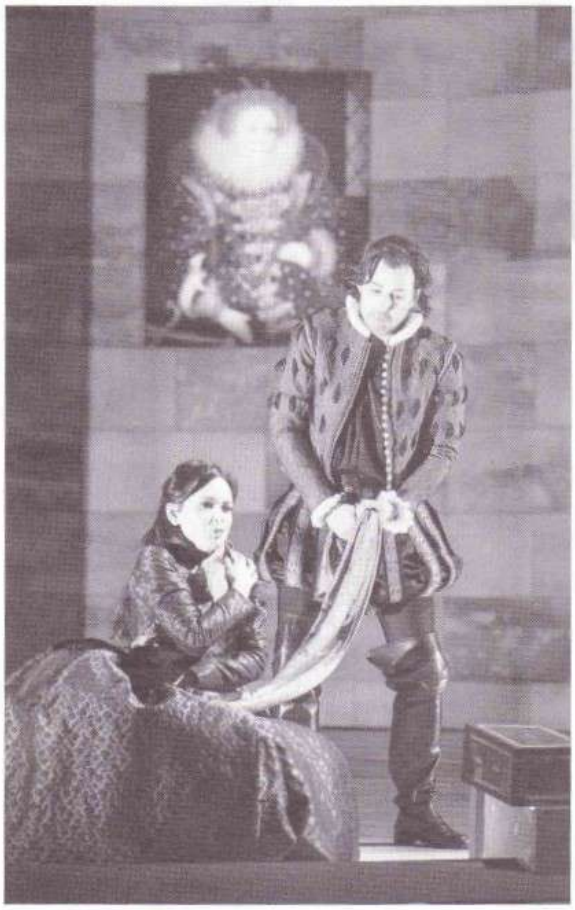
印象に残るチューリヒ歌劇場の公演

2月のチューリヒ歌劇場はすごい。1日に予定されていたハビエル・カマレナ(T)のリサイタルはレグラ・ミューレマン(S)に代わったが、故郷スイスに捧げたプログラムで聴衆の心を掴んだ。スイス人作曲家やスイスをテーマにしたCDからの抜粋で、ピアニストも同じタチアナ・コルスンスカヤだが、生で聴くと温もりが伝わる。シューベルト《春に》、《少年》、ヴィルヘルム・パウムガルトナーの4曲、オトマール・シェック《異郷にて》、ミューレマンがいちばん好きなリヒャルト・フルーリーの《Wandern mit dir》、ショパンの弟子だったエミル・フレイ《Junges Mädchen in den Bergen》、スイス方言で歌うリヒャルト・ランガーの《エーデルワイス》、フリードリヒ・ニグリの《Plange》、リスト「巡礼の年第1年《スイス》」のピアノ・ソロを挟んで、シューベルト《流れの上で》をアルプホルンの美しい音色と共に聴かせた。民謡から始まる後半はフランス語でマルゲリーテ・レスゲン"シャンピオンの曲、ロマンシュ語はヴァルター・ガイヤーの「2つのロマンスの歌」、イタリア語はシューベルト《羊飼いの娘》、ロッシーニ《羊飼いの乙女》を歌って、スイスの4言語を網羅した。最後はクラリネット奏者を招き、シューベルト《岩の上の羊飼い》で締めくくった。

5日には、回り舞台でシンプルに場所を使い分けたデイヴィッド・オールデンの新演出《ロベルト・デヴリュー》(ドニゼッティ)プレミエを観た。「チューダー朝の女王」シリーズを当歌劇場で指揮してきたエンリケ・マッツォーラだが、いままでいちばん冴え、躍動感のあるテンポに歌手たちをうまく乗せていた。しかし声量が十分な女声二人を叫ばせないようにできなかったのか。客席には失笑も漂い、女王役のインガ・カルナなど終幕に高音の音程が上がり切らず、低音もかすれたほどだ。ディアナ・ダムラウもオファーを断ったというこのグルベローヴァの当たり役デビューにあたり、必死だったのだろう。サラ役のアンナ・ガリャチョヴァも、女王より目立つ容姿と声を持っているが、前に当てるフォーカスに欠け、ベルカント唱法とは言えない発声で、更に絶叫するのが残念だった。期待の若手コンスタンティン・シュシャコフが歌うノッティンガム侯爵は、大役過ぎたか、発声が深すぎて一本調子だったが、演劇的には健闘した。題名役のステファン・コステッロは掘り出し物だ。いままで生で聴く機会を逃していたが、将来有望なテノールの〝いま〟を聴けたことに感謝した。


チューリヒ歌劇場の《ロベルト・デヴリュー》から ©Toni Suter

ラフマニノフ生誕150周年

ラフマニノフ生誕150周年の今年、チューリヒ歌劇場とチューリヒ・トーンハレは初めてのコラボ・イヴェントを企画しているが、2月12日はその第1弾としてジャナンドレア・ノセダ率いるフィルハーモニア・チューリヒがイェフィム・ブロンフマンのソロでラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番」を披露した。淡々と始めた冒頭テーマが、ソロ部分で動き出しただけで大きな効果を呼び、熱い情熱も甘いロマンティシズムも高尚に膨らんでいく。そして主題に戻るとロシアの土の匂いが漂い、演技や嘘のない本物のドラマが展開される。ラフマニノフ自身が憑依したような迫力と歌心で歌劇場中を感嘆させた。後半のラフマニノフ《鐘》も好演だったのだが、前半の感動が続き、エレナ・スティキナ、セルゲイ・スコロコドフ、アレクセイ・マルコフのロシア的な声の豊満な響きが印象に残っただけだった。

2月16日にはパリー・コスキー演出のチャイコフスキー《エフゲーニ・オネーギン》再演に行ったが、ノセダの指揮でバンジャマン・ベルネームのレンスキー、エカテリーナ・サニコヴァの絵になるタチアーナ、イゴール・ゴロヴァテンコの題名役を得て、プレミエ時よりもパワーアップしていた。

ビュルゲンシュトック音楽祭

1月31日から2月4日まで第10回ビュルゲンシュトック冬のフェスティヴァルが開催され、チューリヒのライヴハウス、カウフロイテンでのオープニング・コンサートを聴いた。アリス"紗良・オットがショパンの《雨だれ》等を熱く弾く姿に心を打たれたほか、アコーディオンのクセーニア・シドロヴァの弾くピアソラの編曲版がすばらしかった。ヴェロニカ・エーベルレのヴァイオリンとラ・マルカ兄弟のヴィオラとチェロ、そして音楽祭ダイレクターのコンビ、ピアノのホセ・ガラルドと、司会も担当したクラリネットのアンドレアス・オッテンザマーが、意欲的な室内楽を聴かせた。トーマス・ハンプソンは病欠だったため、ベンジャミン・アップルが友情出演した。

そのほかのニュース

2月9~12日に第4回バーゼル作曲コンクールが開催された。ノミネートされた12の室内楽曲がバーゼル室内管弦楽団、バーゼル交響楽団、バーゼル・シンフォニエッタによって初演され、木村真人が2位、神山奈々が3位とダブル入賞した。

マウリツィオ・ポリーニのリサイタルはポリーニが数日前に転倒し、中止された。早い回復を祈りたい。